

終末主日 説教 「主の御許に」 要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2022年11月20日

マタイによる福音書 13 : 36-43

希望の中に待ち望む

終末主日を迎え、教会の暦では1年で最後の主日を迎えました。カトリックでは、この日を「王であるキリストの日」と言っておりますが、それは、「終末」というものが王であるキリストを迎える時でもあるからです。そして、終末主日を迎えた私たちも、これについては同じ考え方をしています。なぜなら、終わりとは、王であるイエス様から離れ、迎えるものではないからです。それゆえ、それは、始まりについても同じことが言えます。私たちにとっての始まりとは、お迎えした王であるキリストと共に始められるものであり、私たちが主を待ち望むアドヴェントを過ごす中でイエス様をよりいっそう間近に感じるのそれはゆえのことでもあるのです。

このように、私たちにとっての始まりと終わりは、王であるキリストを離れて、もたらされるものではありません。教会暦はそのことを私たちに明らかにしてくれているわけですが、このことはつまり、私たちにとっての時間というものは、単に過去から未来へと、私たちとはまったく無関係に流れゆくものではないということです。そして、そこで大事なことは、イエス様と共に刻む私たちの時間は、このイエス様ゆえに無秩序なものではないということです。私たちがその物事の捉え方、その生活様式、生き方など、私たち自身に関わるすべてのものについて、大きな影響を受けるのはそのためです。

このように、私たちが生まれてから御許に召されるその時までの時間は、つまり、私たちがこうして生きているということのすべてはイエス様から離れるものではないがゆえに、イエス様に支えられ、養われ、私たちの人生、私たちの命は大きな意味を持つことになるのですが、従って、その中で養われる私たちの時間的な感覚というものは、何かに追われ、追い立てられるようなものではありません。どうしよう、どうしよう、と慌てふためくものでは決してな

く、キリストゆえに秩序だったものとなり、そして、そのことを体感的に、経験的に教えてくれているのが教会の暦でもあるのです。それは、私たちにとっての時間というものが、共にあるキリストに導かれ、伴われるものであるからです。

希望の中に

ですから、そう考えるなら、終わりの日、私たちが王であるキリストを迎えるということは、私たちにとってはまったく未経験なものではありません。なぜなら、私たちが主の日と呼んでいる日曜日はイエス様の復活を記念するだけでなく、私たちが繰り返し、何度も、こうして一週間の始まりである主の日の礼拝へと招かれているように、私たちが今この時感じているそのままの思いをもって迎えるものが王であるキリストを迎えるその時でもあるからです。私たちが終わりの日を迎えることについて慌てふためく必要がないのはそれゆえのことでもあります。このように、終わりの日に王であるキリストを迎えるということは、私たちにとっては毎週毎週知らされていることであり、また経験していることでもあるのです。それゆえ、主の日から主の日へと導かれつつ歩んだこの一年は、主の日の度ごとに抱いた私たちのその思いから離れるものではありません。仮に私たちが今様々な思い煩いや憂いをその心に秘めていたとしても、そのことを理由に私たちの将来が閉ざされることはありえないからです。なぜなら、その私たちと共にあるお方とはどなたなのでしょう。私たちは終わりをどのように迎えるのでしょうか。私たちがイエス様の御前にあって、今この時、どのような思いをその心に秘めていたとしても、イエス様はそのすべてをご存知の上で、私たちをこうしてこの栄光に満ちた場所に招いてくださっているのです。礼拝に招かれるということはそういうことであり、だから、悔い改めつつ始まる新たな歩みは、仮に私たちがこの先のことに対して

何を思おうとも、イエス様が共にいますというこの一点において、その将来は確実に開かれていくのです。それが私たちの信仰であり、そして、私たちがこの希望を見失わないからこそ、私たちはこの信仰の姿勢を保つことができるのです。

ですから、これについては、この日の御言葉の中でも、イエス様がはっきりと仰っていることです。最後のところで、「その時、正しい人々はその父の国で太陽に輝く」とイエス様がこう仰るように、終わりの日に約束されているその輝きとは、そこに至るまでの私たちの「正しさ」ゆえのものでもあるからです。それゆえ、イエス様が共にあるがゆえに、それはこの時も私たちには約束されているのであり、まただから、私たちの信仰も、その信仰の姿勢も、信仰を持って生きる私たちの生き方、その時間の過ごし方のすべてが、私たちがこの約束のうちに止まるからこそ、より確かなものとされていくのです。この一年、私たちが与った数々の恵みは、私たちがそういう時を刻む者でもあるからです。ただし、それは、だから、すべてが思い通り、考え通りに運んだということではありません。個人的な事柄についても、教会という交わりについても、すべてが願い通り、思い通りに運んだわけではないからです。そして、この思い通りにならないという点においては、私たちは世の人々と何ら変わるものではなく、それゆえ、私たちは恵みの日々を過ごしながらも、世の人々と同じように思い煩いの日々を過ごすものでもあるのです。それは、私たちが終わりの日の輝きのうちに置かれながらも、終わりの日がいまだ訪れたわけではないからです。

中間時を歩む

このことはつまり、終わりの日が確実に訪れることを知らされながらも、はっきりとしたことは、私たちにはいまだ分かってはいない、そういう中間時を歩んでいるのが私たちであるということです。ただ、そのことを誤魔化さず、まっすぐ私たちに伝えてくれているのが共にあるイエス様でもあるのです。そこで、イエス様が仰ったことが次のことです。「良い種を蒔く者は人の

子、畑は世界、良い種は御国の子ら、毒麦は悪い子らである。毒麦を蒔いたのは悪魔、刈り入れは世の終わりのことで、刈り入れる者は天使たちである」と、弟子たちに対し、イエス様は群衆に語った毒麦の譬えをこのように説明するのですが、イエス様が弟子たちにこう説明するのは、次のことが終わりの日に起こることになるからです。「だから、毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにもそうなるのだ。人の子は天使たちを遣わし、つまづきとなる者すべてと不法を行う者どもを自分の国から集めさせ、燃えさかる炉の中に投げ込ませるのである。彼らはそこで泣きわめいて歯ぎしりするであろう」と、未だ隠されている終わりの日の真実をこのように語るのです。ただ、それについては私たちは心配には及びません。イエス様が弟子たちに隠れたところでこっそりとこの真実を語っているように、私たちはイエス様について行くだけの群衆とは違うからです。

ところが、心配するには及ばないはずのその私たちが終わりという言葉を目にして、心穏やかでいられなくなるのはどうしてなのでしょう。それは、真実を聞かされながらも、終わりの日がまだ訪れたわけではない以上、二つの可能性があるからです。耳元で「本当に」「大丈夫」と囁かれると、たちまちのうちに不安に駆られてしまうのはそのためです。また、それだけではありません。本来は焦ったり、慌てふためいたりする必要がないのが私たちであるはずなのです。ところが、その私たちが焦り、慌てふためき、もうダメだとそう思うてしまうのはどうしてなのでしょう。しかも、そう思ったのは一度や二度ではありません。これまで何度そういうことがあったかと思うのです。それは、自分の考えたとおり、思ったとおりに物事が運ばないことが度々であったからです。そして、その度に私たちは自信を失うことにもなったのですが、弟子たちにとって、その最大のものがイエス様の十字架の出来事でもありました。それは、イエス様の十字架は、弟子たちにとっては考えられない、考えたくもないことであったからです。こうして弟子たちは自信を失うことになったのですが、

ですから、イエス様から終わりの日について知らされても、本来であれば、安心していいはずの私たちが、もしかしたら自分もと、ついそんなことを考えてしまうのは、自信を持つようとして持ち得なかった弟子たちと同じであるからです。

しかし、それにしてもそのイエス様が弟子たちと群衆とを分けて捉えているのはどうしてなのでしょう。それは、「正しい人々はその父の国で太陽のように輝く」とイエス様が仰るように、そこには確かな違いがあるからです。ただ、そのはっきりとした確証が得られない今、イエス様がどれだけ真実を語ったとしても、言葉だけに安心できないのが弟子であり、私たちでもあるのです。そして、私たちの心にそのように暗い影を落とすのは、十字架という想定外の出来事を経験したからです。いみじくもそのことを明らかにしたのがイエス様の一番近くで、多くの時間を過ごしたペトロでありました。イエス様が裏切りを予告し、ペトロは強く否認したにもかかわらず、結果はイエス様の仰るとおりであったからです。しかし、それにも関わらず、甦りのイエス様によって赦されているのが私たちでもあるのです。終わりの日の真実が明らかにされているのはそれゆえのことでありますが、けれども、すべてが明らかにされるのは終わりの日を待たなければなりません。つまり、どうなるかも分からないまま、終わりまでを歩み続けなければならないのが私たちであるということです。

ですから、そこには様々な課題が置かれます。生活全般のことだけでなく、健康面のこと、経済的なこと、また、教会だけが私たちの居場所であるわけではありません。私たちは教会の人たち以外の様々な人たちと関わらなければならず、それゆえ、社会の一員として私たちは様々なことを求められることにもなるのです。終わりまでを歩むということは、そうした一つ一つの課題に私たちが答えていかなければならないということなのです。そこで、そうした課題に答えつつ私たちの思うのです。それは、イエス様に喜ばれているのだろうかということです。それは、私たちがイエス様から真実を知らされながらも、いや、知ら

されているからこそ、真実にふさわしく歩んでいるとの確信が持てずにいるからです。不安になり、疑いを抱いてしまうのはそのためでもあります。ただ、イエス様が仰る真実を知ることがなければ、そんな心配を抱く必要もありませんでした。けれども、皮肉なことに、明らかにされたその真実ゆえに、私たちは不安や疑いを大きくしていつている、信仰ゆえの恵みが大きい一方で、このように他の人たちよりも不安と疑いを大きくしているのがイエス様と共に歩む私たちでもあるのです。

では、私たちの信仰とは、瘦せて貧しいものなのでしょうか。もし、私たちの信仰がそのような瘦せた宗教観しか持ち得ないものであるとしたら、私たちはどうなってしまうのでしょうか。また、そもそものところで、私たちが信仰の豊かさを知らされながらも、その一方では瘦せた信仰、宗教観しか持ち得ないとしたら、その行き着く先はどこなのでしょう。ここでのイエス様のお言葉は、そんな確信を持ち得ない私たちに対するダメ出しをしているようにも思えるのですが、そうすると、炉に投げ込まれ、泣きわめき歯ぎしりすることになるのが私たちということなのでしょう。もしそうであるなら、私たちは終わりというものに期待や希望を抱くことなどできません。時折耳にする、終わりについてはできるだけ触れないようにしておこう、終わりは縁起の悪いことだから、余り言葉にしないようにしよう、そういう消極的な声は将来に対する期待や希望が失われているからなのでしょう。ただ、もちろん、それが間違った信仰理解であることは、私たちにも十分すぎるほど分かっていることです。こうして私たちは世の人々と同じように、世間に埋没していくことにもなるのですが、けれども、十字架の出来事が弟子たちと群衆、世の人々が一緒になってもたらされたように、そうなることはイエス様にも分かりすぎるくらい分かっていることでした。ならば、弟子たちと群衆を分ける理由はどこにあるのでしょうか。

貧しい信仰ゆえに

ここでイエス様が仰っていることは世の

終わりについてであります、その真実を伝えるためにイエス様は弟子たちと群衆とを区別しているのです。ただ、群衆も弟子たちも、罪人であるという点では皆同じです。それゆえ、この同じところから真実を聞いていこうとする時、そこで想定される結論は一つです。しかし、にもかかわらず、イエス様は弟子たちと群衆を区別するのは、弟子たちのことをあげつらうためではありません。罪というこのどうしようもないものを私たちは自分の力で克服することなどできないからです。それは、罪とは私たちの一部であり、私たちそのものでもあるからです。私たちが御国から閉め出されるかも知れないと思ってしまうのはそのためです。しかし、その私たちとイエス様は共にいてくださっている、イエス様と共に多くの時間を過ごす中でそれを知らされているのが私たちでもあるのです。そこで私たちは経験するのです。イエス様の憐れみ、イエス様の慰め、イエス様の癒やしを時間を共にする中で経験し、イエス様が私たちと離れずに共にあることを知るのです。従って、終わりとは、私たちにとっては将来の分けの分からないことではありません。今この時のことであり、それは、イエス様ゆえにその永遠の交わりの中に置かれているのがイエス様の弟子である私たちであるからです。

ですから、私たちは何事についても恐れる必要はありません。イエス様と共に歩むことで、信仰的成功体験を積み上げてゆきさえすればいいのです。ただ、そのために私たちは何をしなければならないのでしょうか。一つには、失敗を恐れないということです。そして、もう一つは、自らの罪、その罪深さをまっすぐに見つめるということです。イエス様と共に過ごすその時間において大切なことはこの二つのことだからです。それは、信仰的な失敗というものは、私たちが失敗を恐れすぎるがゆえに起こるものであり、同時に、その罪を誤魔化そうとするところに生じるものでもあるからです。私たちがこの世の功績を求め、この世での自信を深めようとするのは、まさにそれゆえのことだと思ふのです。けれども、失敗を繰り返すしかないその私たちが

が終わりまで歩み続けることが赦されているのは、その私たちとイエス様が共にいてくださっているからです。ですから、イエス様が私たちに求めることは、立派なすばらしい信仰のあり方などではありません。罪を見つめ、自信を失い、そういう失敗を繰り返しながら味わい知る貧しい信仰です。それは、その私たちと共にあり、御許へとお召しになるのが私たちの主イエス様であるからです。まただから、ルターはその自らの臨終の際に「私は乞食だ」と言ったのです。

私たちの罪は、この中間時においては、私たちの内側にどこまでも離れず付きまとっているものです。そういう意味で、私たちはどこまで行っても貧しい信仰しか持ち得ないのです。ルターの言葉はそのことを明らかにしてくれているのですが、けれども、その私たちから離れず、御許へとお召しになるのがイエス様でもあるのです。私たちにとっての今とは、ここに通じるものであり、それは、かつて、今も、そして、これからも、私たちの主イエス様が私たちからひとときも離れることはないからです。ですから、私たちの信仰とはここに幸いを見出すものであり、それゆえ、この幸いが私たちのこの交わりをさらに豊かで喜び多いものとさせるのです。それゆえ、そういう意味で、私たちは冒険心を失ってはならないのだと思います。ただし、この冒険心とは、無謀さを意味するものではありません。集団としても個人としても、その弱さを深く自覚しつつ、この弱さと共にあろうとすること、そして、勇気をもって大海原に漕ぎ出すこと、私たちが見つめる終わりとは、勇気をもって漕ぎ出すその先に置かれているものでもあるからです。そして、ここに導くために、私たちと共にいてくださっているのが私たちのイエス様であるのです。だから、失敗の数が多ければ多いほど、私たちは共にあるイエス様を深く深く知ることになるのです。その慰めと励ましを受け、終わりまでを共に歩み続ける私たちでありたいと思います。祈りましょう。